

ヴェーダ祭式の祭火とその象徴思考について

井狩 彌介

京都大学・人文科学研究所

1. ヴェーダ祭式

インド最古の文献群ヴェーダは、紀元前1200年頃から約一千年間に順次に成立し、編纂されたさまざまな文献の総称である。ヴェーダ伝承は、最初期のインド・アーリアンの故地北インドのパンジャブ平原からアーリアンの移住地域の拡大とともに次第に地域的に東インドに中心が移り、紀元前数世紀には北インドのほぼ全域に伝承が拡大し、伝播されていった。ヴェーダは、当時の北インドの上層社会を中心として行われた祭式群、いわゆる「ヴェーダ祭式」の祭式手続きとその解釈にかかわる伝承を主題としている。その内容は、祭式に用いられることば（讃歌、歌詠などの祭句）と祭式行為、そしてそれら祭句と行為の意義解釈の伝承の集成である。すなわち、ヴェーダとは祭式伝承の記録集成ということになる。

祭式伝承の継承は、社会の最上層に位置付けられた知識階層ブラーマンを中心としておこなわれた。祭式組織は歴史的な発展のなかで次第に複雑化し、祭式の実行は祭式知識を占有したブラーマン祭官群に委ねられた。また、彼らの間でも祭式形態の複雑化とともに職掌の分担が次第に固定してゆき、各種の専門祭官の職掌分化が成立することとなる。いっぽう、祭式伝承の発展と地域的拡大にともない、各地に伝播して展開する祭式伝承のなかで新旧の学派の分化が発生してゆく。祭式の伝承は、これら専門祭官が形成した学派の集団のなかで保持されて展開される。したがって、ヴェーダ祭式伝承は、具体的には祭式学派に組織されたブラーマン・グループの移動と相互交渉という形で展開しつつ、インド亜大陸各地へ伝播していった。今日でも、極めて限られた数ではあるが、ヴェーダ伝承はインドの各地に生きた伝承として残っている。

ヴェーダ祭式の体系は、大別して二種に分れる。個人の家庭においておこなわれる、誕生儀礼、ヴェーダ学習儀礼、結婚儀礼、葬送儀礼などのいわゆる「人生通過儀礼」を中心とする「家庭祭式(グリヒヤ, gr̥hya)」と、祭場、祭式手続きがより大規模で、共同体の首長が祭主となって執行される「シュラウタ祭式(śrauta)」の二種である。歴史的には、おそらく両者とも並行して存続し、いずれかにより古い淵原をもとめることはできず、また両者はその扱う領域を異にするが、確立した祭式体系のなかでは後者により高い権威を認めている。前者ではひとつの祭火が、後者では複数の祭火(三祭火、あるいは五祭火)が用いられる。シュラウタ祭式を執行するものは、かならず、すでに家庭祭を行っていなければならないとされる。

ヴェーダ祭式の基本思考は、世界を支配している宇宙秩序の正しい進行とその秩序の地上での発現をもたらすことにある。この宇宙秩序をリタ(r̥ta)という。その秩序にかなったひとつのものがあり方が地上での豊かさ、豊穡をもたらす。この秩序の発現をもたらすもっとも有力な手段が祭式儀礼であり、さらに、その儀礼で発せられる祭式のことば(マントラ)が儀礼の効力に

もっとも寄与すると信じられた。この、ことばの力、正しいことばの発現がもつ力についての信念が古代インドの思想展開の一つの大きな契機となっている。

ヴェーダ祭式の祭式形態は、「賓客歓待儀礼」の形式を基本に置く。すなわち、地上世界に善きものを贈る神々は、祭式において大事な客として迎えられ、ことばと供物とによる歓待を享受する。この際、祭場に築かれた祭火壇に燃え上がる祭火への献供を、祭火であるアグニ神(Agni)が神々のもとに運ぶ。祭火アグニは彼自身神格であり、地上世界と天上世界、人間と神々の間の贈り物の交換を仲介する。祭火を媒介としてふたつの世界のあいだで供物と恩恵の互恵が交わされるわけである。

祭式の実際の手続きの上で、この「賓客歓待儀礼」のかたちは基本的に保持され続けるが、いっぽう、祭式行為の意味付けを問う解釈文献のなかでは、呪術思考(magical thought)による象徴思考が全面的に展開されて支配的になっていった。この呪術思考のなかでは、異なった次元にある存在の間の象徴的な対応関係が想定される。たとえば、祭場において地中に穴を掘るとき、神々と祭場の事物、祭官の身体の一部が対応させられて、鋤を手を持った祭官は、「サヴィトリ神の励ましを受け、わたしはインドラ神の両の腕、プーシャン神の両手をもってこの鋤を掴む」と唱える。また、「黒カモシカの毛皮はブラフマンのあらわれ、私はブラフマンの力によってみずからを強める」の祭文のように祭式行為を通じて祭場にある事物をコントロールすることによって、その事物と対応関係にある神的な力、さらには神格そのものをもみずからのコントロールのもとに置くという思考方法である。呪術思考を典型的に示すのが、祭式が対象とする神観念の変化である。最古段階の文献であるリグ・ヴェーダでは、神はデーヴァ(deva)と呼ばれ、個性をもった生き生きとした存在でイメージされる。いっぽう、呪術思考が浸透した段階では、神的な存在は神格(devata)という抽象名詞のかたちで祭式論議のなかで扱われる。この呼び方は、宇宙に働くもろもろの力(神的な力)がいまや工学技術としての祭式呪術によって操作する対象とみなされるようになったことを含意している。異なった次元の存在のあいだに対応を認める思考法は、はじめ、神々が活動し働く宇宙と祭式が進行する祭場との間といったふたつの次元で考えられたが、次第に、宇宙—祭式—人間 という三つの次元の存在の間の対応関係というパターンに定着するに至る。この考え方は、祭式を媒介として宇宙と人間との有機的な対応関係を認める思考に発展し、ウパニシャッド文献に見られるような神秘主義的な思想を産み出した。

2. 祭火アグニ

ヴェーダ祭式の実際の祭場において中心となる位置を占めるのが、祭火である。祭火は人と神々、地上世界と天上世界との間を媒介する役割を果たす存在としてヴェーダ期の祭式思考のひとつの焦点を形作っている。

祭火アグニ(Agni)は祭式の現場で祭火壇のなかで燃え上がる火であると同時に火神アグニでもある。インド・ヨーロッパ系諸言語圏の古代文化と宗教において、火はきわめて重要な役割を果たして来たが、そのなかでも古代インドにおいて祭火に託された機能は他に類例をみない

程に大きいものがあつた。たとえば、アーリア人たちがインド亜大陸に進出する以前の時期において、イラン高原においてインド・イラン共通時代が存在し、そののち一派が東のインド亜大陸に分れて移住してヴェーダ文化を形成した。古代イラン側の祭式宗教においても祭火は重要な役割を果たしていた。ただし、そこでの祭式形態では、かならずしもすべての供物が祭火に投じられたわけではない。むしろ、イラン側におけるゾロアスター教においては、薪木、香、脂肪などといったある限定された種類の供物が聖火に捧げられるに過ぎず、祭火が純粋に聖火として崇拝される傾向を帯びていった。いっぽう、インド側でのヴェーダ祭式においては超自然存在への献供では、低次の精霊や死霊などに対するものを除き、ほとんどすべての種類の供物が祭火に投じられて火神アグニによって神々の許へと運ばれた。たとえ、それが実際には火の勢いを弱めかねない水や液体であってもである。たとえば、毎日朝夕に行われるアグニホートラ祭(Agnihotra)では熱されたミルクが祭火に投じられ、また特に高い権威が認められるソーマ祭では、精神を高揚させる特別な植物ソーマの搾り汁も祭火のなかに捧げられる。(このイラン側での対応物であるハオマは水の中に投じられた。) すべての供物は祭火であるアグニの神を通じて天界に選ばれるものと信じられたからである。地上と天界を媒介して人間と神との間をつなぐ祭火の役割は徹底して押し進められた。その帰結のひとつの例が、葬送式における火葬の観念の成立である。生前において祭主の供物を天界へと運んだ祭火は、祭主がこの世での生を終えて死の世界へと旅立つとき、死者としての彼をもまた天界へと運ぶ任務を託される。この火葬の観念も、また古いインド・イラン共通時代には存在しなかったもので、インド・アーリアンにおいて成立した新しい考え方だった。古代インドのヴェーダ期に展開した祭式思想において、祭火アグニは人間にもっとも密接な親しい存在として思考体系の中核を占める存在となつていった。

ヴェーダ祭式においては、他の神々が目に見えないかたちで天上にあるのに対し、アグニの神は具体的に地上で接触できる存在として、人間にとってもっとも親しい神として、人間との密接な関係が強く意識された。たとえば、祭火がガールハパティア火壇に置かれる時に唱えられるマントラ(祭句)は、次のようにいう。「炎は頭である。このアグニが(祭主の)親しき友として家畜とともに栄えるように。(我らの)子と子孫を護るひさし(安全な住処)を護れ。」(TaittirīyaBr.1.1.4.8) また、祭火の獲得によって祭主が期待するものは、祭火を移動する時に祭火をみずからのうちに掴むという象徴行為(agnigrahaṇam)において唱えられる次のマントラによく表されている。「初めに、私はみずからのうちにアグニを掴む、富を豊かにするために、よき子孫を得るために、力豊かな息子を得るために。みずからのうちに私は子孫[=生殖の力]を、みずからのうちに(ことばの力の)輝きを置く。われらは身体を損なうこと無く、よき勇者を得んことを。われら死すべきものの心臓のうちに入り込んだ不死なるアグニをわれらは自己の内に包み込みたい。彼がわれらを見捨てて離れ行くことがないように。」家畜(=財産)、子孫の繁栄による家系の存続という、ヴェーダ期のひとつの重要な関心事が火神アグニに託されていることに注意されたい。祭火を得ることは、この世における富と子孫の保持、豊穡な世界の獲得を保証することにほかならなかつた。さらに、ヴェーダ後期の祭式思想の発展のなかで、

祭主ともっとも親しい神アグニは、「内なる火」として内面化され、ついにはひとの魂そのものと同一視されるに至り、その後の宗教哲学思想を生み出す契機とまでなっていくのである。たとえば、祭式手続きの複雑な進展の中で生みだされた、旅に出る者が祭火を身に付けて出立するという祭式手続きが、祭火が祭式をおこなうものの「いき」(life-breath)を通じて体内に取り込まれるというかたちで、祭火の内面化という思想の契機を生み出し、祭場に燃える祭火アグニと人間の体内にある火の同一視という観念が生まれる。このような異なったレベルの存在の対応という思考は、祭火と人間の魂(アトマン)の一体視という観念を成立させて、ヴェーダ後期のウパニシャッド文献以降の古代インド哲学思想につらなる思考を展開させた。

3. 祭火の獲得方法

いっぽう、祭式体系が確立すると、上に述べた二種の祭式形態、シュラウタ祭式とグリヒア祭式との間に、前者により高い権威を認めて後者より上位に置く考え方が定まり、両者を分離させる傾向が生じたことは、古代インド祭式思想の展開のうえで興味深い重要な問題に連なっていく。

この問題は、ふたつの祭式形態がそれぞれ用いる祭火がどのような種類の火から取られるかという問題と関わっている。祭式において中心的な役割を果たす祭火は、最初にどのようにして祭場にもたらされるのだろうか。この問題はヴェーダ祭式における祭火の観念の発展を考えるうえできわめて興味深い視点を提示する。祭火の源泉となる火を得る方法には、大別してふたつの範疇がある。ひとつは自分の血縁に属しない「他者の火」から火を分けてもらうものであり、もうひとつはみずからの所有する火起こし道具によって新しく火を作り出すものである。これは一対の木製の用具で、いっぽうを他方の上で回転させ、摩擦によって火を発生させる。この道具をアラニー(arani)という。ヴェーダの二種の祭式形態のうち、家庭祭式では、基本的に前者、すなわち「他者の火」が使われる。いっぽう、シュラウタ祭式では、両者が併用されるが、歴史的には次第に後者、すなわち、火起こし具を用いる方式に比重が置かれていく。

古代インド社会のヴァルナ制度において、上層三階級(ブラーマン、クシャトリヤ、ヴァイシヤ)に属する少年が社会の一員として認められる最初の契機は、伝統社会の必須教養としてのヴェーダの学習である。ヴェーダ伝承がアーリアン社会の成員としてのアイデンティティーを保証する。ヴェーダを学び終え、その教養を身に付けてはじめて彼は結婚し、妻を得て一家を構えることが許される。この結婚式の際に、彼は家庭祭式で用いる祭火を得て一人前の社会人となる。家庭祭火を所有して彼は社会人として出発する。家庭祭式ではひとつの祭火が用いられる。家庭祭式の規定を与える家庭祭儀規書(グリヒア・ストラ、Gr̥hyasūtra)の多くが規定するところでは、最初の祭火は新妻の実家から、すなわち、妻の父親の所有する家庭火を分火することによって得られるものである。新居に設置される最初の祭火は結婚式の際にもたらされ、この火が結婚後に新居に運ばれて、新しい一家の祭火となる。以後、この祭火を中心に家庭での儀礼が行われ、この祭火が一家の主人の死の時まで保持されていくことになる。興味深いことに、最初に得られる祭火は新郎の父祖から受け継がれるのではなく、いわば「他者の火」、

すなわち新婦の実家からもたらされるのが本来だった。結婚して一家を構えることは、社会的に独立した存在として認められることを意味するが、古代インドでこのことを象徴するのが、新しく祭火を手に入れて、これを保持してゆくことだった。この「最初の祭火」が自分の父の祭火から分けられるのではなく、他者の火から得られるのが基本原則だということは、注目すべき事実である。なぜなら、古代インドの社会制度は父系社会を基盤としているからである。インドの古代法典は相続制度(父系男子を中心)や祖先儀礼(直系血縁の三代の祖先を供養)などで知られるように、明確に父系の血縁組織を中心に置くことを規定している。この一般原則からみれば、社会的存在のアイデンティティを象徴する「家の火」は、当然に自分の父親のもつ祭火から採られることが予想される。しかし、実際にはこの家庭祭火は妻の実家から分けられたものを用いるのである。家庭祭火を規定する祭式書は、最初の火の出所として、結婚した妻の実家の火のほかにもさまざまな選択肢を与えている。たとえば、新郎が結婚するまで学習していたヴェーダ伝承の先生の家の火、ヴェーダ祭火をすでに数多く挙行したブラーマンの家の火、裕福なヴァイシア(生産にたずさわる第三階級)の家の火などである。前のふたつの例は、豊かなヴェーダ伝承を保有するひと、すなわち、宗教的、精神的な意味での豊かさを、最後の例は、経済的に豊かな富を保有するひとを対象としている。後述する、火を新たに起こす道具(アラニー)を用いる方法も挙げられるが、これは積極的には奨められていない。これを見ると、やはり最初の祭火の出所としては、「他者の火」が関心の中心となっているようだ。(アーバスタンバ・グリヒアーストラ5.15; ゴウビーラ・グリヒアーストラ1.1; カーディラ・グリヒアーストラ1.5; ヒラニアケーシ・グリヒアーストラ1.2などを参照。) これらのオプション規定を考え合わせると、ひとが一家の主人となって最初に獲得する火は、精神的に、あるいは経済的に富裕な他者から、その富を受け継ぐという意味合いがこめられていると考えることができよう。

これに対し、三ないし五の数の複数の祭火を用いるシュラウタ祭の場合、古くには家庭の祭火を分火することと、祭式挙行の際に鑽火道具(アラニー、*araṇī*)を用いて新たに火を鑽り出すというふたつの方法が併用された。すなわち、神々への供物を扱う二つの祭火、ガールハパティアとアーハヴァニーヤは、鑽火道具で起こした火が分化されるが、いっぽう、ダクシナ祭火は基本的に家庭祭火から派生した火が用いられた。ただし、新しい祭式学派では次第に後者のみを用いる方向が採られるに至る。すなわち「自己の火」のみによる祭式挙行である。家庭祭火とは無関係に、祭主の所有する鑽火道具から起こされた火は、まずガールハパティアの壇に安置され、ついで他のふたつの祭火壇へと移されてゆく。この結果、三つの祭火はすべて同質の存在とされるのである。祭式の実践におけるこの傾向、すなわち、祭火を構成する諸要素から「他者」ないしは「他者にかかわる存在」を排除していく傾向は、祭式解釈の発展のなかで中期ブラーフマナ文献以降に明瞭な、祭式の場を純粹に自己完結した世界として造り出そうとする思想傾向を反映するものと考えられる。他者との交換、交渉といった社会関係を排除して、ある意味では閉じられた祭式世界の純粹化が押し進められる。その祭式論理の発展のひとつの到達点がウパニシャッド文献に定句のかたちでさまざまに表現される、人間の本質と宇宙の本質とが同一であるという考え方、祭主の自己は宇宙と同一視され、祭主自身の魂が宇宙の根底にある原存在と等置される思考だった。

4. シュラウタ祭火の起源神話 — Excursus

家庭祭火が本来、新妻の実家から得られるという規定は、実はシュラウタ祭の最初に置かれる[[シュラウタ祭式]火壇構築式(アグニアーデイヤ、Agnýādheya)]の解釈文献にみえるシュラウタ祭火の起源神話と呼応するところがある。祭式に対する解釈説明を神話のかたちで打ち出すブラーフマナ文献は、地上の王ブルーラヴァスと天上の仙女アプサラスであるウルヴァシーの契りと息子の誕生という物語のなかで、最初の聖火の天上からの人間界への将来を語っている。この神話は各祭式学派において、それぞれ若干異なったヴァージョンで伝承されている。それらは語りの構造の大枠では一致するが、それぞれの関心の焦点のあり方を反映して細部の詳細と強調点に異同を示している。(各学派に伝承される本神話のヴァリエーションについては、さしあたり以下の文献を参照。H.Krick, *Das Ritual der Feuergründung*, Wien 1982, p.205f., p.219f.; T.Goto, “Purūravas und Urvaśī” aus dem neuentdeckten Vādhūla-Anvākyāna (Ed. Ikari), *Dr. Johanna Narten Commemoration Volume*, 2001.)

様々なヴァージョンのうち、シャタパタ・ブラーフマナ 11.5.1 が伝える神話は大略以下のごとくである。

天女アプサラスのウルヴァシーは地上の王ブルーラヴァスを恋して、地上に住んだ。ただし、彼との約束のひとつに、彼の裸身を見ることがないようにとの禁忌が含まれていた。ウルヴァシーがあまりに長く地上に留まったので、彼女の父方のガンダルヴァたちは彼女の天上への帰還を望んで一計を案じ、夜半に彼女が身近に置いている子羊を略奪して、ブルーラヴァスをおびき出した。略奪者を追って裸のまま飛び出したブルーラヴァスをガンダルヴァによる雷光が照らし、あたかも昼光のような明るさの中でウルヴァシーはブルーラヴァスの裸身を見てしまった。その瞬間に、彼女は消え失せ、天界に戻ったのである。そのとき、彼女は子供を身ごもっていた。悲しみにひしがれて彷徨を重ねるブルーラヴァスは、ある蓮池で水鳥に姿を変えたアプサラスたちに出会うことになる。ブルーラヴァスはウルヴァシーに再び戻ることを嘆願するが、彼女はふたたび地上に住むことをこぼみ、その代わりに二人の間に生まれた子供を彼に託す。さらに、ウルヴァシーの父方のガンダルヴァたちはブルーラヴァスに恩典として祭火を与え、それをういた祭式を行うことによってブルーラヴァスが神々の一員となりうることを約束する。ブルーラヴァスが地上に持ち帰った天上の火は、聖樹に姿を変えた。この樹から祭式において火を鑽り出すために用いる鑽火具が作られた。この鑽火具で造り出した火が天上からもたらされた火と同じものである。

この神話は、祭式に用いられる祭火は、本来、神々が所有していた火が地上にもたらされたものであることを語っている。古代ギリシア神話で天上から火を地上にもたらしたプロメテウスの話と通じるところがある(語源的にも、火を鑽り出すというサンスクリットの動詞 *pra-math-* は「プロメテウス」の語と対応する)。この神話において、いま注目しておきたい一点は、地上で行う祭式のためにもたらされた天上の火である。この聖火はブルーラヴァスの妻であった天女ウルヴァシーの父方に属するガンダルヴァから彼女の夫ブルーラヴァスに恩典として与えられた。この神話では、天上からもたらされた祭火とふたりの間に生まれた子供とは別のものとして語られているが、次にあげる祭式手続き書やほかのいくつかの神話ヴァージョンが示唆する

ように、おそらく神話の原形では、火と子供とは同じものであったろう。生まれた子供は、はじめ妻の父方のガンダルヴァに預けられ、ついで天上からの贈り物のかたちで、地上の王である夫プルーラヴァスに与えられた。契った男女がいっぽうは人間、他方は天上の神々の一員といういわば異種婚の形になっているが、得られた最初の祭火の源が妻の父方からもたらされるという火の由来譚は、先にみた、家庭祭のための最初の祭火が妻の実家、すなわち妻の父のが保持する火から分けられたものという祭式規定と同じ構造になっている。いいかえると、ヴェーダ祭式において用いられる最初の祭火は、それが家庭祭であるかシュラウタ祭であるかの祭式ジャンルの違いを越えて、同じ来歴によって獲得されるものということになる。

火壇構築祭アグニアーデイヤの祭式手続きを具体的に記述するシュラウタストラは、火起こし道具のアラニーを用いて祭火を作り出す場面で、この神話を前提とする次のような儀規を与えている。

「アドヴァルユ祭官は、一對の木製の棒と板からなる鑽火具のうち、土台となる板に向かって『お前は(天女アプサラスである)ウルヴァシーである』と唱え、(いっぽう、これに挿し込んで回転させて摩擦させる)棒に向かって、『お前は(地上の王)プルーラヴァスである』と唱えかける。彼は『わたしは(生命力である)バターを塗る』と唱えて(両者に)バターを塗る。彼は、『お前達は雄々しい(男子)を産め』と唱えて(棒を下の板に)差込む。.....(棒に巻いた紐を引いて回転させ)火を鑽り出す。誕生した火に向かって『お前は(両者の息子)アーユスである』と唱えかける。」
(ヴァードウーラ・シュラウタストラ 1.1.3.10-15)

この祭火を作り出す場面での祭式規定は、上述のような神話のヴァードウーラ学派のヴァージョンを前提として、いま新しく作られた祭火が、プルーラヴァス、ウルヴァシーの二人の生殖行為によって聖火が子として誕生することを示唆する。[下図参照]

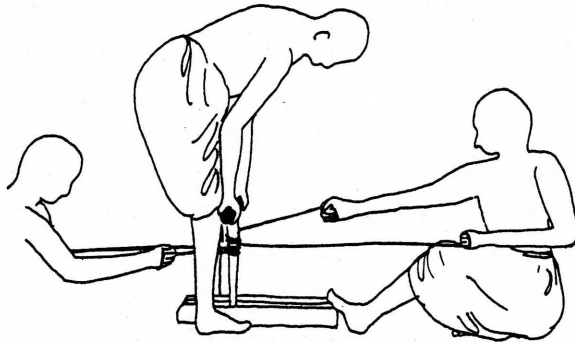


Fig. 2 The priests produce fire by means of fire sticks (arani).
When the ritual is performed at the sacrificer's home,
this procedure is omitted.

Illustration taken from M.Tachikawa, Homa in Vedic Ritual - The Structure of the Darśa-pūṇamāsa, From Vedic Altar to Village Shrine(ed. by Y.Nagano and Y,Ikari) (Senri Ethnological Studies no.36), Osaka 1993., p.244.

5. 祭火とその象徴するもの

ヴェーダ祭式の祭火とその象徴について、重要と思われるいくつかの問題を以下に摘記しておきたい。

ヴェーダ祭式は、すべて祭火を中心として展開される。古代インドのアーリアはインド・ヨーロッパ語系統の諸民族文化とくらべて、火を用いる儀礼を特に発達させたところに特徴がある。ヴェーダに規定される二種類の祭式形態のうち、より規模の大きいシユラウタ祭式の場合を例に取り、祭式が行われる場としての基本祭場の概念図を示して置く。図(1)は神々に献じられる供物が穀物製品、ミルク製品などである、比較的単純な祭式の場合であり、(2)は、中心となる儀礼で神々への供物にソーマという特殊な興奮効果のある植物の絞り汁を用いるソーマ祭の場合で、特別祭場が付加される。この場合には、調理の火ガールハパティアと献供の火アーハヴァニーヤが本来の場所からそれぞれ東に移動する。(3)は、(2)の特別なヴァリエーションである、献供祭火のために特設のレンガ祭壇を設置するアグニチャヤナ祭の場合である。祭火壇のかたちが大きな鳥の飛翔するさまをかたどって造型されているところに特徴がある。これは、後述するアーハヴァニーヤ祭火の基本機能である、神々への供物を天界へ運び届けるという観念を、鳥の中でもっとも空高く飛翔する鷲のイメージに託して具象化したものである。

基本祭場(1)の矩形祭場の大きさは、およそ15(m)×10(m)の面積で、そのなかに三つの祭火が設置される。祭場の基本軸は東西線であり、東向き、すなわち太陽の昇る方向に向かって作られる。この祭場に置かれる火壇は練り土で作られる。各火壇のサイズはほぼ同じで、口径はおよそ1メートル四方あり、高さは直立した祭主の膝までの高さで約0.5(m)である。祭火壇以外の重要な場所としては、鼓(つづみ)のかたちをしたヴェーディ(vedi)があり、ここに祭式用具と供物の材料などが置かれる。ちなみに、祭場や祭具のサイズはすべて、その祭式を主宰する祭主(yajamāna, sacrificer)の身体部位を基本単位として作られるのが原則であり、その意味でひとつひとつの祭式での祭場は、祭主が異なればそれに応じて違った大きさのものとなる。

三つの祭火は、西側から順に、円形のガールハパティア祭火(家長の火)、半円形のダクシナ祭火(南の火)、正方形のアーハヴァニーヤ祭火(献供の火)である。このうち、ダクシナ祭火にはいくつかの別名があり、それはこの祭火の祭式での機能によって使い分けられる。アンヴァーハーリア祭火の別名がもっともよく使われるが、それはこの祭火で、主要献供の終了後に祭式を分担しておこなった祭官たちをもてなす食事がこの祭火で調理されることからきている。オウダナパチャナという別名は、やはりこの祭火でオウダナ、すなわち祭官たちに饗応される炊飯が調理されることにもとづいている。月の満ち欠けの重要な節目におこなわれる「新月・満月祭(Darsapūrṇamāsa)の新月祭の一部をなす祖先儀礼もこの祭火のもとで行われる。ガールハパティアの火の基本的な機能は、祭式で使われる供物を調理することである。神々に捧げられる供物はほとんどの場合なまものは使われず、火で調理したものが用意される。ここで調理された供物が、東に運ばれ、アーハヴァニーヤ祭火のなかに投げられて神々のもとに運ばれることになる。つまり、ガールハパティアとアーハヴァニーヤは、この意味で一對をなしている。

ヴェーダ・シュラウタ祭式の祭場概念図

(from F.Staal(ed.), AGNI, The Vedic Ritual of the Fire Altar, Berkeley 1983.)

図(1)

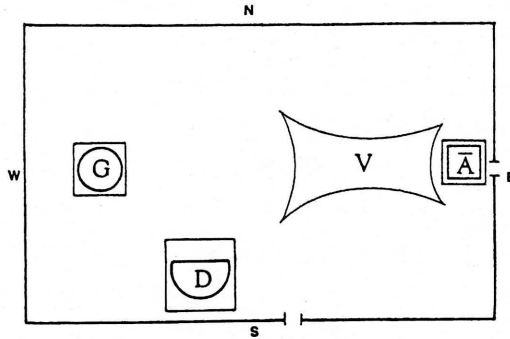


Figure 1—The Ritual Enclosure

- G: *gārhapatya*, domestic fire
- D: *dakṣiṇāgni*, southern fire
- Ā: *āhavanīya*, offering fire
- V: *vedi*, receptacle for ritual implements and substances of oblations

図(2)

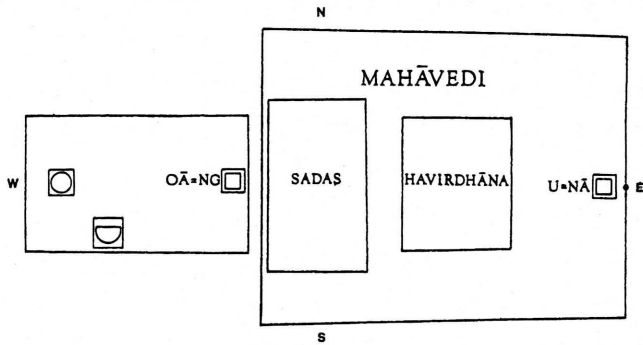


Figure 4—Ritual Enclosures for the Soma Rituals

- OĀ: old *āhavanīya* (old offering altar)
- = NG: new *gārhapatya* (new domestic altar)
- U: *uttaravedi*
- = NĀ: new *āhavanīya* (new offering altar)
- Sadas: hall of recitation
- Havirdhāna: hall for preparation of Soma, or Soma hall

図(3)

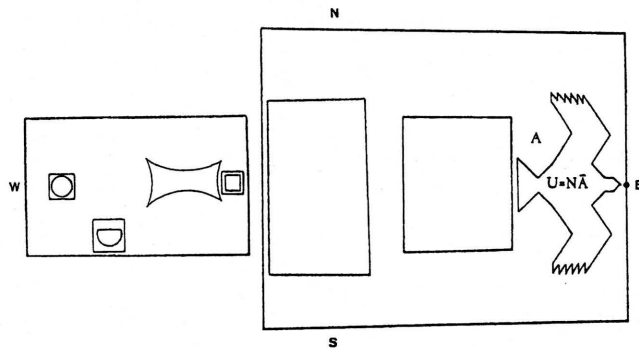


Figure 5—Ritual Enclosures for the Agnicayana

これに対し、ダクシナ祭火は機能レベルからみれば上にみたように他のふたつの祭火とは異なっている。この祭火は、調理の火の機能を与えられる、その意味ではガールハパティア祭火と共通した役割をになうが、ダクシナ祭火で調理される食物は神々に献じられるのではなく、人間である祭官たちである。この意味で、ダクシナ祭火は、ガールハパティアとアーハヴァニーヤがシュラウタ祭式での神々への献供にかかわるものであるのに対し、家庭の祭火、あるいは家庭の日常の火の延長上にあるという性格をもっている。このダクシナ祭火はどのように獲得されるかについて、ふたつの見解が別れる。ひとつは、古い学派の見解で、この祭火は家庭祭火に由来する火から取るとするものである。これに対して新しい学派は、この祭火は「他者の火」からではなく、新しく鑽火具によって作りだす、あるいはガールハパティア祭火から分火するという。すなわち、新学派はダクシナ祭火を他のふたつの祭火と同様に、その祭場で新たに作られた祭火を用いるべきだと考えるのである。

本来は異なった性格をもつダクシナ祭火が、シュラウタ祭式の祭場が全世界のすべてを象徴的にあらわすという、コスモロジーの構造的な必要性から導入されてその存在を固定されるに至ったものとみることができる。すなわち、本来は由来を異にする二種の祭火系列が、祭式体系の整備とともに、起源を同じくする等質の三つの祭火として取り直されて統合された。

祭式象徴のシステムのなかに融合された三つの祭火は、以後、象徴レベルでは統合されたシステムのなかでそれぞれ「三」という数字に象徴される全体性を構成する、互いに補完的な存在として位置付けられるようになった。

実は、図で示した三つの祭火壇の形状は、それぞれが象徴する世界のかたちであるといわれる。円形のガールハパティア祭火は円形の大地の形をあらわす。「まことに、ガールハパティアはここなる世界である。そしてまことに、ここなる世界は丸い。」(シャタパタブラーフマナ6.7.1.26) また、円形の大地は水の帯にぐるりと囲まれている、ともいわれる。(同7.1.1.13)「ガールハパティアの標識として円を作るべし。なぜならここなる世界は円形だから。……ダクシナ火の(標識として)半円形を、なぜなら(天地の)中間(世界)は半円形だから。……アーハヴァニーヤの(標識として)四角形を、なぜならかなたの世界は四角形だから。(カータカサンカラナ16.1f.)天地のあいだの中間スペース(中空、アンタリクシャ)が半円形とされるのは、平坦な円形の大地の上に、天がドーム状にアーチをかけているため、これを垂直断面で切ると半円形の形に見えるからである。天が四角形(正方形)とされるのは、天が四角角にどこまでも広がることを表している。

さまざまなタイプのシュラウタ祭式のうち、もっとも最初におこなわれるのが「祭火壇設置祭(Agnyādheya)」であるが、三つの祭火はこの祭式でいま列挙した順に設置されてゆく。[図(1)を参照] 祭式解釈を述べるテキストであるブラーフマナでもっともよく出されるこれらの祭火の象徴解釈では、ガールハパティア祭火が大地(pr̥thivī)、ダクシナ祭火が中空、すなわち天と地のあいだの空間スペース(antarikṣam)、そしてもっとも東に置かれるアーハヴァニーヤ祭火は天界(dyauṣ)、すなわち、神々の住む天上の輝く世界(svargo lokas)である。大地(iyam, pr̥thivī)

一空(antarikṣam)一天(asau lokah, dyaus, svargo lokah)の三世界区分がヴェーダの宇宙観においてもっともふつうに用いられるもので、これらを合わせた総体が「ここなるすべて(idam sarvam)」(あるいは「これなるもの(idam)」)と表現される。これらの世界を代表する神々としては、それぞれアグニ神(Agni)、ヴァーユ神(Vayu, 風神)、そしてスーリア神(Sūrya, 太陽神)が出されることが多い。また、諸存在の住まいする領域という観点からは、大地には人間が、中空には祖先霊が、天には神々が割り当てられている。(祖先霊は神々よりも低い領域に住まいするとされるからでもあるが、また、中空をあらわすダクシナ祭火ではシュラウタ祭での祖先儀礼(piṇḍapitryajña)が行われる場所でもある。)(また、人体レベルでは、三つの祭火はそれぞれ、頭、氣息、眼と同置される。)この三つの世界は、ヴェーダの宇宙論(コスモロジー)における全世界(この世の総体, idam sarvam), 生けるものがある領域の全体、をあらわしている。いかえると、この基本祭場は、聖なる空間でありつつ全世界を象徴しているという祭式的世界観をあらわす。

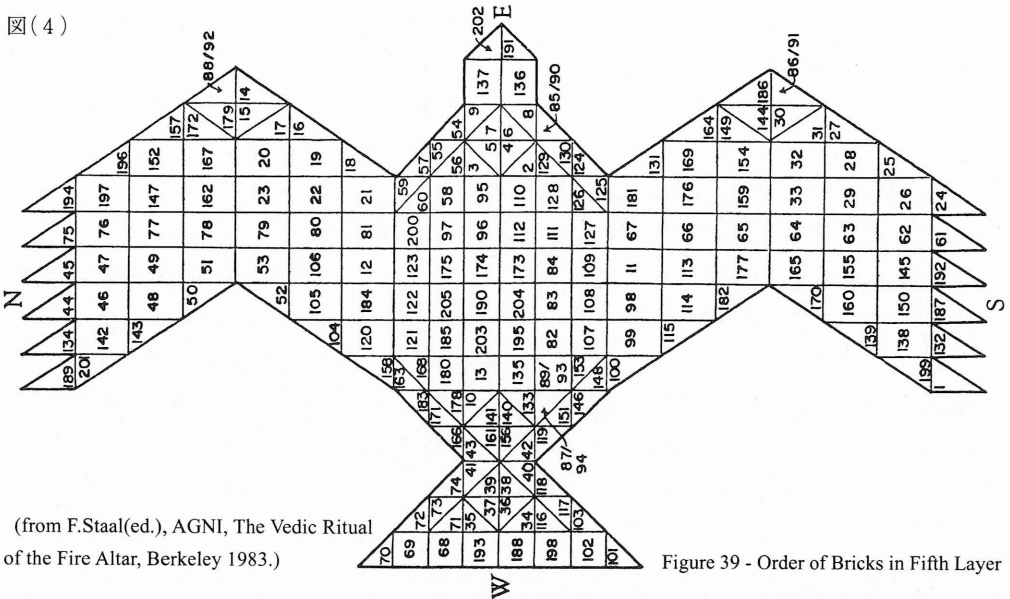
祭火壇設置は、三つの祭火壇を設置し、そこに順次、火を分けて置いてゆく。祭場の設営において、一つのアグニからの多数のアグニへの分化(vibhakti, vyūha)という祭式行為は、宇宙生成論(コスモロジー)の観点からみると、世界の初めにあったまだ分化してない渾沌とした原存在(一者)が、分けあげられて三世界となったという神話のシェーマに対応している。「(原初には)、これらの諸世界は一緒に存在していたが、三層に分れた。」(ジャイミニヤ・ブラーフマナ1.185; シャタパタ・ブラーフマナ1.4.1.22f.)この世界三分観は、より古いタイプの世界二分観神話、天地の未分状態からの天地の分離と確立による世界の発生神話からの発展である。第三の世界としての中空(antarikṣa, 間にある空間)は、天と地を分け隔てるために間に置かれたとされ、いわば天と地を独立に存在させるために介在する空間概念である。

いっぽう、祭式での具体的手続きを見てゆくと、これらの諸世界は静的に並列されているのではなく、祭場での運動は西から東へ、ガールハパティア祭火からダクシナ祭火を通してアーハヴァーニヤ祭火へと移動する、すなわち、大地から天界への上昇運動を示唆している。それを典型的にあらわすのが、うえの「祭火壇設置祭」(アグニアーデーヤ)の祭火アグニを導く儀式、アグニプラナヤナ(Agnipranayana)である。祭場の西側に造られたガールハパティア祭火壇のなかに、ふたつの木製の道具を用いてきりだされた火を置き、薪をくべてこれを燃え上がらせる。この火に液体バター(ajya)を注いで供えたあと、燃える一本の薪を取り出し、祭官と祭主はこれを捧げて東へと行進する。このとき一頭の雄馬を先頭に立てる。雄馬は豊かな生命力をもたらす火の象徴である。この行進中に薪の火は次第に高く持ち上げられる。この行為は、大地から天への上昇を象徴している。「彼は(たいまつを)三たび高くかかげる。これらの諸世界の数は三である。それゆえ彼はこれらの諸世界に到達する。火を高くかかげるとき、彼はこの世界(=大地)に達する。火をもって東に歩むとき、彼は中空に(達する)。彼が(アーハヴァーニヤ祭火壇)を築くとき、かなたの世界(=天界)に彼は達する。その(火)を降ろして(火壇に移し)たあと、彼はそれを再び手に取ってはならない。そうすれば(到達した天界からの)離脱が(生じる)。彼は不幸に陥る。」(カータカ・サンヒター8.12.96.9f.)この東への行進は、太陽の昇るタイミングを明確に意識し、それに合わせて進められる。太陽が地平線に昇る時に、祭場での東への行進、

大地から天界への道行きが開始されるのである。

祭火を分かちながら東へ移動する祭式行為アグニプラナヤナは、また同時に、富の獲得を求めての新しい領域の獲得を象徴する行為でもある。多くの学派では、この行進の際に、並行してひとつの車輪が西から東へと回しながら転がされてゆく。この車輪を転がす行為はチャクラヴァルタナ(cakravartana)と呼ばれるが、王者が戦車を駆って大地を征服してゆくさま(cf. 転輪王チャクラヴァルティン)のように、アグニ神が障害を焼き払いながらその支配領域を拓げてゆくさまをあらわしている。また、この車の象徴は、同時に天界に駆けてゆく太陽の戦車をもあらわす。祭火アグニは、すべての光り輝くものと同一視されるが、とりわけ天界にあっては太陽を象徴する。祭式家のイメージでは、神々に献じられた供物を天界へと運んでゆくアグニの神は、空中を由由に飛翔する鳥になぞらえられることが多い。このイメージをもっともよく具象化した祭式のひとつに「アグニチャヤナ(アグニ神祭壇構築祭)」がある。図(4)に示したように、特別祭場に大煉瓦2000個を使って築き上げられたアグニ祭壇は、大鷲の飛翔するさまを写したものである。祭式古派の解釈によれば、この祭式をおこなった祭主はこの鳥の背に乗って、あるいはこの鳥に変身して地上から天の世界へと旅立ってゆくのだと言う。ヴェーダ祭式の祭火アグニのイメージはこの鳥の形の祭壇にもっとも典型的にあらわされている。

図(4)



(from F.Staal(ed.), AGNI, The Vedic Ritual of the Fire Altar, Berkeley 1983.)

Figure 39 - Order of Bricks in Fifth Layer

ヴェーダの祭式行為表現では、さまざまなレベルでの象徴が複合して表されることが多い。上にみたように、シュラウタ祭式の基本祭場に設置される三つの祭火には、本来異なった由来をもつ祭火伝承(ガールハパティア、アーハヴァニーヤ両祭火とダクシナ祭火のふたつの系列)が融合した跡を残している。しかし、いったんこの融合が確立すると、三祭火の儀礼解釈のなかにさまざまな多義の象徴が読み込まれてゆく。上に挙げたシュラウタ祭火設置祭アグニアーデーヤの核となっている祭火の移動と設置をおこなうアグニプラナヤナ(Agnipranayana)は、その一つの例である。この「祭火移動」の儀礼は、直接にはヴェーダ祭式の基本となる三つの祭火

の設置を記述するものであるが、いっぽうでは宇宙生成論として全世界を構成する大地、空、天の三世界が分かれて生じた原初の世界創成を再現し、他方では、日の出の時に行われる祭場の西側のガールハバティア祭火から東端のアーハヴァニーヤ祭火への行進によって、この儀礼をおこなう祭主の地上から天界への上昇の道行きを予約するものでもあった。確立したヴェーダ祭式の最終形態では、シュラウタ祭式の目的は祭主の死後の天界の獲得が第一義とされる。祭式の冒頭で祭主は、「天界(svarga)を望んで、わたしはこれこれの祭式をこれから行う」と宣言する。さまざまな祭式で天界上昇のモチーフはさまざまな象徴行為で表されるが、このアグニアーデーヤ祭式は祭火設置行為そのものによってそのことを表現している。

[Abstract]

Symbolism in Vedic Fire Rituals

IKARI Yasuke
Kyoto University

1 The Vedic Ritual

The oldest surviving body of texts in India known as the Vedas discuss the various interpretations of the so-called Vedic rituals which were performed among the upper classes in northern India. The Vedic rituals consist of *gr̥hya* which include household rites conducted during the various passages of life, and *śrauta* which are more large-scale ceremonies conducted by the community leader in front of the sacred fires.

The Vedic rituals are based upon the notion that the cosmos is governed by a proper order. This order of the cosmos is called *ṛta*. One who is in tune with the order of *ṛta* was believed to be able to bring about fertility. The most effective way of bringing about fruitful results was through rituals. Mantras used in rituals were believed to enhance the efficaciousness. Belief in the word-power brought about an important development in ancient Indian philosophy.

A distinct feature of the Vedic rituals is the ritual fire set up to intercede between the gods of heaven and the people on earth. Vedic rituals take the form of receiving honored guests. Thus, the gods who receive the benefits of the earth are treated as honored guests. When offering is made, a special platform is erected where various offerings are put in the ritual fire. On this extraordinary occasion a deity known as *Agni* intercedes on behalf of the people on earth by carrying these goods to the gods in the heavens. In this way, the offerings pass between the two realms through the ritual fire.

The form that this fire ritual takes is receiving honored guests. But according to various commentaries that explain the meaning of this ritual state, there is also an element of enchantment that is symbolized in these procedures. While these magical rituals are taking place, a symbolic relation between the various dimensions is established. In its initial phase, there seems to have been two dimensions (that of gods, that of ritual) that were discussed among theologians, but as time progressed this developed into the dimension occupied by the gods, the ritual dimension, and the human dimension.

2 The Agni, Ritual Fire

The Agni deity was thought to have the closest relation with the human world. The deity operates within the ritual context and also takes upon a human manifestation. But these two symbolic aspects are combined within the intellectual context. For example, the procedures for carrying the ritual fire when embarking on a journey are internalized as the concept of the Agni and the human soul as one entity which is called *ātman*.

An interesting development in the intellectual history of ancient India is the establishment of a hierarchy for rituals. By separating the *śrauta* ritual from the *gṛhya* and placing the former above the latter, the hierarchal relation was defined. The performance of these fire rituals was related to the place of worship. When a young couple were married, a ritual fire was transferred to their new home. Initially, the fire was brought from the bride's home rather than from the husbands. By contrast, three to five ritual fires were used during the *Śrauta* ritual where fires were distributed from the family fire. In other cases, *araṇī*, fire-drill tools, were used to produce a new fire belonging to the sacrificer himself. But gradually over time, the latter method was employed exclusively. In other words, "one's own fire" decided the form of the ritual. This reflects the intellectual tendency of the middle *Brāhmaṇa* period to present ritual space as a self-perfected realm.